

御幸町だより

京都御幸町教会
〒604-0933
京都市中京区御幸町通二条下る
山本町434
TEL・FAX (075) 231-3441

『タンポポが生えてくる』

牧師 村島 義也

タンポポについて、今日私たちが思い浮かべるのは大抵セイヨウタンポポなのではあるまいか。英名:ダンデライオン~ライオンの歯を意味するフランス語<ダン・ド・リオン>に由来。葉のギザギザのイメージだろう。強そうな名に相応しく、タンポポは逞しい。土手、公園、道端のアスファルトの隙間、至る所に生えてくる。でもそれだけに困る人もいるかもしれない。子供の頃、フーッと綿毛を飛ばしたのも、近所の花壇やお庭や畑には迷惑をかけたことだったかも知れない。庭や花壇にこだわりを持つちゃんとした几帳面派には、タンポポは他所からの侵入者、いわゆる雑草の一つということにもなるだろう。

こんな話がある。〈ある人が、庭に芝生を植えた。丹精込めて育てたが、芝生と一緒にタンポポが生えてきた。抜いても、抜いても、タンポポが生えてきた。途方に暮れて、彼はその道の専門家に問い合わせの手紙を書いた。しばらくして返事があった。「どうしてもタンポポを退治できないのであれば、タンポポを愛することを学んでみてはどうでしょう」〉。

抜いても、抜いてもタンポポが生えてくる庭は、私たちの人生(生活)の現場のようではないか。タンポポ退治に躍起になっている人の姿は、悩みや厄介事を抱えた日の私たち自身のようにないか。自分の庭についてはそれなりの理想や目論見がある。しかし思い通りにはいかない。タンポポが生えてくる。タンポポは語っている~人生とはそうものだと。雑草は生えて来るし、生えている。自分の意思や願いとは違うものをたえず抱えながら生きていく。またタンポポは外からやって来て、外のことに気づかせる。自分という狭い庭の外に広がる自然について。今を広く大きく囲んでいる創造主なる神のご意志とテーマがあって、その中に私の生の場が置かれているのだということ。

先に<ダン・ド・リオン>という語を上げたが、現代の

フランス語ではピンサリと言うそうだ。意味は〈ベッドの中のおしっこ〉~タンポポのハーブとしての利尿作用からくるものらしい。なるほどタンポポ、若葉はサラダに出来る。漢方にも用いられる~強壯、健胃等の効果あり。そして何と驚くなかれ、一説によればタンポポは三千万年前位から地球上に咲いているとか...どうだいタンポポ! そう思うと、自分のお庭のこだわりよりも、タンポポが咲いている~その事の方がよほど偉大な地球のテーマのような気がしてくる。タンポポを雑草と言うのは人のテーマにおける身勝手な分類。タンポポには無駄なく、捨てる所がない(Ⅰテモテ4:4)。それこそ自然の豊かさであり、美であるか。自分の理解と意志における現実・狭く抱えている現実、そこでだけで「わたし」の意味が成り立つというものではない。自分の^{こだわり}や煩いや願いの庭~しかしそこを更に大きく囲む命と意味の豊かな連なり、神のテーマ・御旨の支配というものがある。だからタンポポが生えている。

使徒パウロのことを思う。彼の庭には棘の木が生えていた~病木だ(Ⅱコリント12:7ff)。また彼は宣教の労苦についてこう語っている、Ⅱコリント11:23~29。〈日々迫るやっかい事・心配事〉。言うなればタンポポだらけだ。しかしその彼が言う、「すべては、あなたがたのものです。~世界も生も死も、今起こっていることも将来起こることも。一切はあなたがたのもの、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなのです」(Ⅰコリント3:21~23)。私たちの命は自らの内ではなく、神の内に、そしてキリストの内に息づいている。自分として上手くいってようがいまいが、我々の命の今は等しく広く神の御旨に抱かれている。そして神のテーマは愛なのだ聖書は教えている。

因みにタンポポの花言葉は「愛の神託」あるいは「神託」。恋占いが由来のようだが、ちょっと意味深く聞こえてくる。(他に「別離」というものもあるが、まあそれはそれとして)。